

## 第11回近畿地区大会開催に向けて

### 「周術期看護の未来」 ～ 多様化する社会に求められる看護 ～

日本手術看護学会近畿地区大会長 佐々木 光隆

2024年の年明けに石川県能登地方を震源とする大規模な地震、羽田空港で発生した航空機事故と心痛む災害や事故がありました。お亡くなりになりました方々には心からご冥福をお祈りし、被災された方々には心からお見舞い申し上げます。被災者の救済と被災地の復旧・復興支援のためにご尽力されている方々にはご自愛の上ご活躍されますことを心からお祈りいたします。そして航空機事故対応にあたっていただきました皆様におかれましてはご尽力に心より感謝申し上げます。

我が国は高齢化が進行しており、厚生労働省は団塊世代が75歳以上となる2025年を目途に、要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を推進しています。時代は高齢者においても合併症のない回復を達成し、社会復帰へ導き地域と連携していくことを求めています。こうした時代の流れの中で、手術医療の現状を見てみると、ロボット支援手術、ハイブリッド手術、ナビゲーションやAIの導入など手術医療は急速に進歩し複雑化、高度化しています。そのうえ手術・麻酔時間の短縮や入院期間の短縮などのスピード感も求められています。一昔前では手術対象外となっていた高齢者や重症患者などの手術が可能となり高難易度症例が増加しています。

こうした手術医療の現状に伴い、私たち手術室看護師に求められる知識や技術も高度化し、更には迅速な判断力が求められています。安全な手術進行や術後の合併症なく社会復帰へと導くためには、術前の患者基礎データを適切にアセスメントし患者の周到的な準備が重要となります。私たち周術期に専門性を持つ手術室看護師は、こうした手術医療の現状に対して、幅広く展開していく力があり、患者さんと医療を繋ぐキープレイヤーであると思います。統合的なアプローチにより患者さんに適切な治療や看護を提供し、入退院支援及び医療連携のあり方も含め、回復や健康の維持・増進のためには何が必要なのかを本地区学会が探求する機会になれば幸いです。

また、本地区学会の開催にあたり、ご支援、ご指導を賜りました諸先生方、企画や準備にご尽力いただいた地区大会実行委員長をはじめ会員各位、ご協賛いただきました企業様の皆様に厚くお礼申し上げます。